東京の教育
復刊第十四号　東京都教師会発行
（事務局）横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三一〇

日韓二〇〇〇年の歴史の終焉

―名越、草開両先生を偲んで―

空花正人

今日のようにこじれきった日韓関係を、他界されたお二人の先生はどうご覧になっていらっしゃるであろうか。お二人は、日本教師会や日韓教育文化協議会などを通じ、韓国と交流を深めておられたことは余りにも有名である。名越先生は『日韓２０００年の真実』を編著された。草開先生は、日本の皇族の梨本宮方子妃が大韓帝国皇太子に嫁がれて、どれほど日鮮両民族の心の絆を深めることに寄与したかを内外に示された。いずれも温かいまなざしで韓国朝鮮の人々や歴史を見つめておられた。

果たしてこれから我々は同じような温かいまなざしでいられるかどうか、絶望的である。明治の頃の福澤諭吉のように、亜細亜東方の悪友とは謝絶すべきではないか。

日韓併合は誅求苛烈な植民地支配だったのか、同化政策は犯罪的であったのか。ここに一部であるが、朝鮮での学究生活が長かった学者が、現代でいう「歴史戦」だ「修正主義」だ、などの雑音の少なかった戦後間もない頃に論壇に発表された論文を紹介したい。

『朝鮮統治への反省』　鈴木武雄　『世界』岩波書店　昭和二十一年五月号（創刊第五号）

著者は一九二八年から敗戦まで京城帝大で助教授から教授まで勤め、戦後は東大教授を経て退官後は武蔵大学学長までなった経済学博士である。

「敗戦の結果とはいえ、朝鮮に対する日本の領土的・政治的支配というこの大前提は取り除かれた。たとえ種々の事情によって日鮮人の感情がここしばらくの間疎隔せざるを得ないとしても、やがては必ず再び相寄るべきことが確信せられる。そしてその時こそ、優越感を払拭した日本人と被支配者感情を一擲した朝鮮人と、この両民族の精神的結合は初めて自然的な姿を呈するに相違ないのである。」と率直な反省の気持ちを表出しさらに、「日本の朝鮮統治の根本方針が『一視同仁』であり『内鮮一體』であって、いわゆる『同化政策』であって、ややもすると『内鮮一體』のスローガンの下に推進せられた一連の『皇民化』運動が、あまりにも形式的に過ぎしかも総督の治績を示す指標として末端当局がいたずらに数字の上での成功にのみ狂奔したために、かえって逆効果を生んだ場合の多かったことは返す返すも遺憾なことであった。そして太平洋戦争下、徴兵と徴用と供出との犠牲の度がようやく強くなるにしたがって、皇民化は彼らにとり明らかに民族の苦難のみを意味するに至ったのである。」と、猛反省を促している。

それでもなお、『一視同仁』または『内鮮一體』の第二の面は、文字通りに日鮮人を全く平等視し、日本人優越的差別待遇もしくは差別感情を克服し、いわゆる植民地関係を止揚せんとした理想主義的な性格を有していた。そこには公式的な帝国主義的植民地支配に対する批判と反抗があり、日韓合邦の大前提は覆しえないとしても、同じアジア人同士である以上、文明人が野蛮人を支配する従来の公式的植民地体制はここに再現さるべきでないといういわば同胞愛的な新しい外領統治の理念があったことは否定すべくもない。されば独立運動にまでは走りえないが、しかし良心的な日鮮人の多数がこの運動を支持した反面、一部固陋な日本人の側にむしろ見出されたことを看過してはならない。例えばかの昭和十三年以降実施せられたいわゆる『内鮮共学制』や戦時下の窮屈な主食配給における『内鮮一體』の貫徹等はこの理念を背景とするものであるが、何よりも卑近な事例として、満員電車を待つ乗客の行列、戦時下の配給品を買うための行列、さては映画館の入場を待つ行列等すべてそうした行列に日鮮人が

入り混じって並んでいる光景を目撃した朝鮮旅行者ならば、必ずやそこに他の植民地には見られない朝鮮統治の特異な性格の一面を見出したに相違ないのである。」と、日本人の側の善意を認めている。

さらに、日本の教科書で悪名の高い、創氏改名に関しては、明白に弁護している。

「朝鮮における姓の制度が、その本貫の制度とともに、明らかに原始的な血縁共同体的社会関係の名残を示すものであり、それがなお社会的慣行ないし精神生活上に保存せられたとしても、実質上例えば社会的生産過程においてはもはや単なる遺制に過ぎず、社会関係はすでに父母を中心とする小血縁団体すなわち『家』の関係に分派していたことを思うならば、そしてまた、金姓李姓朴姓等数種の姓を名乗るものが圧倒的に多いという状態をもってしては、人口の増加、世態の複雑化、取引の頻繁化をきたせる近代社会においてはもはや個人の識別を十分に果たしえないということを思うならば、家を単位とする氏の制度の創設はそのこと自体近代社会関係に適応する漸進的政策と言い得るのである。しかも朝鮮人社会の長い伝統を破壊することをおそれ、この創氏制度によって在来の姓そのものはこれを消滅せしめない建前をとったことも看過してはならないのである。しかも日本人式氏名を名乗ることを許したのも、あくまで朝鮮人の自発的要求を前提とすることが法令の建前であった。すなわち日本人式氏名を名乗らんとする朝鮮人に対しては決してこれを日本人の特権として拒否するものではなく、戸籍上の届出のみによって自由に認められるという極めて開放的な性格を持つ施策であったのである。」

ほかにも「世論の支配的な傾向は、この点について、朝鮮に対する日本の帝国主義的搾取を強調し、日本の利益のために朝鮮人をもっぱら奴隷的境遇に沈淪せしめたと断定している。日本の朝鮮支配が本質的には帝国主義的であったことは率直に認めなければならないが、しかし一切を公式的に簡単に片づけてしまうことはかえって良心的な反省とならない場合が多い。」と、朝鮮統治が決して悪いものではなかった証拠として次を挙げている。

「朝鮮の農業生産力の飛躍的発展の背景には、主として日本の技術的指導と資本的援助に基づくものであり、何よりもまず大規模な土地改良事業、水利施設の発展があった。なお、統計数字は、日本の技術と資本による朝鮮米の増産以上の量を日本に移出したものではないことを示している。よって朝鮮に対する日本の米収奪を結論することは必ずしも正当ではないのである。」と、搾取を否定し、「一視同仁的同化政策究極の目標が日本内地人に比し低劣な朝鮮人の民度を内地人の水準にまで引き上げることにあるのは論を俟たぬ。その（民度向上の）指標として人口を見れば、朝鮮人の人口増加は併合後の三十四年間に二倍に、そして職業別では李氏朝鮮時代同様、第一次産業によって支えられていることはわかるが、近代産業勃興の結果、相対的に鉱工業、商業及び交通業等の人口比重が増加していった。」と、おおかたの近現代朝鮮史家が眼をむきそうな、公平な見解を述べている。

私は、名越先生のお話を思い出し、又希望を持ちたいと思う。

「（韓国人はなぜ中国に抗議しないのか）中国は強いし怒るからできない。しかし日本人はすぐお詫びする。いつまでも頭を押さえておかねば危ない国だ。日本人の魂を眠らせておく必要がある。日本人に教えてあげよう。中韓両国に文句を言わせない方法がある。それは日本がもっと強くなることだ。日本人が強くなったら韓国はみんな親日に変わるよ。嘗ての日韓がそうであったように。」

（会員）

或る高校の卒業式にあつたこと（2）

藤井雅和

前稿では、或る都立高校の昭和五十年度の卒業生が卒業式式場に国旗（日の丸）を掲揚する事などを要求し、学校側がこれを拒否したといふ事件について、概要を述べた。このことはサンケイ新聞が卒業式当日の朝刊で大きく報道し、世間の耳目を集めることとなつた。

このことがあつた数年前までは高校の卒業式と言へば、国歌国旗に反対する左翼勢力に指示されたかのやうな一部の過激派高校生によつて卒業式粉砕が叫ばれたり、妨害行動がおこなはれたりしてゐたのであるから、この民主的な手続きを踏んで学年の生徒をまとめ、職員団体に牛耳られて政治的な運動に明け暮れてゐた教員集団に対峙したこの高校生たちの存在は、社会問題として新聞社が記事化するにふさはしい衝撃的な事実だつたやうだ。

実際、この生徒たちの在学中は、国鉄の労働組合の一部が、例へば「スト権スト」などといふその語からして理解不能の「ストライキ」を度々行つたため学校が何日も休校に追ひ込まれて混乱させられたり、校内の職員団体が屢々「違法ストライキ」を実施して職務を放棄し、授業が中止されたりなど、特に進学校の生徒らにとつては将来の人生に極めて重大な支障を来される損害を被つてをり、生徒らはさうした行動の裏にある或る勢力に対しての疑義を薄々感じ取つてゐて、これらに反発する意識が一連の活動にも働いてゐたのであると思はれる。

先の新聞記事では、掲揚推進派の生徒の声も取り上げてゐる。それによると、「小学校一年生の時、東京オリンピックだったぼくらは、日の丸を輝かしいものと思っている。戦争の暗いイメージという過去を脱皮した新しい考えをとってもいいではないか」「先生方のなかには、日の丸を掲げよなどという生徒を育ててしまったことは、我々の教育がまちがっていたからだ、などと反省しているというがナンセンスだ」といふ意見が紹介されてゐる。

また、同新聞は「視点」といふ解説記事の中で、教員側が多数意見を少数派にすり替へようとしたのではないかといふ指摘もしてをり、つまり、多数が絶対多数ではないと言ふことを理由に生徒の意見がまとまつてゐないとした学校側の結論に疑問をとなへ、多数決の原理を無視してゐるのではないかといつてゐる。確かに絶対多数を得られないから意見として取り上げないといふのでは、多数決といふものの考へ方が覆されるし、我が国の選挙制度や国会の存在自体も成り立たない。

同紙には当時の校長の談話もあり、「ことしの卒業生が賛成多数だからといって、来年以降どうなるかはわからない。こういう問題は多数の論理だけでは判断できないことだ。その意味で慎重に対処したのだが、まずほとんどの生徒にわかってもらえたと思っている。」などと述べてゐる。この談話の主は教育者、学校経営者としては限界を持つた人物であつたといはざるを得ない。卒業式の式次第は校長の専決事項であるとして最初から拒否するといふならともかく、いかにも姑息な手段で生徒の要求を躱(かは)さうとし、いたづらに事を長引かせてしまつたのは何事に於いても職員会議、といふより職員団体の顔色を窺ふことしかしてこなかつたこの時代の校長の通弊といへよう。

また、先の記事の生徒の談話中、このやうな「生徒を育ててしまったことは、我々の教育が間違っていたからだ、などと反省し」たといふ教員の例があつたが、この発言をした教員の中には、後に指導主事になつて教育委員会に入り、最終的に教育庁の最高幹部の一人になつた者もゐると聞く。従つて後日、入学式卒業式等で国旗掲揚国歌斉唱を行ふ儀式正常化を推進したはずだが、立場が変はるとかうも変貌するものかといふ点で、記憶される人物の一人であらう。

この卒業生らも、数へてみると皆還暦を過ぎてゐる。社会においてどのやうな活躍をしたのかが興味深い。

時代が平成を経て昭和が遠のいて行く中、かうした高校生たちのめざましい活動があつたことが忘れられないやう、ここに記しておく次第である。

（了）（会員）

戦前の中学国語の教科書を読む（九）

［次の文章は、八波則吉編著『現代國語讀本　巻三（現在の中二前期）』（昭和十年版）からである。漢字は原文通り正字にしてゐるが、ワープロで正字が出ないものは、今の書体にしてある。送り仮名は原文通り、読み仮名は、いくつか新たに

加へた。」

南洲遺訓　西郷隆盛

一、事大小となく正道を踐み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦其の差支を通せば、後は事宜次第工夫の出來るやうに思へども、策略の煩屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先に行けば成功は早きものなり。

一、人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。

一、己を愛するは善からぬ事の第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出來ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するが爲なれば、決して己を愛せぬものなり。

一、過を改むるに、自ら過てりとさへ思ひ付かばそれにてよし。其の事をば棄てて顧みず、直ちに一歩踏出すべし。過を口惜しく思ひ、取繕はんとて心配するは、譬へば、茶碗を割り、其のかけを集め合せ見ると同じにて、詮もなきことなり。

一、命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。此の始末に困る人ならでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

一、道を行ふものは、天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせざるは、自ら信ずるの篤きが故なり。

一、天下後世までも信仰悦服せらるゝ者は、唯是一個の眞誠なり。古より父の仇を討ちし人、其の數擧げて數へ難き中に、獨り曾我の兄弟のみ今に至りて兒童・婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして世に譽められるゝは僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。（南洲翁遺訓）

原註　西郷隆盛　號は南洲。薩摩國（鹿兒島）の人。明治維新の功臣。明治十年歿。年五十二。

編集者註　『南洲翁遺訓』は全五十五章から成る。この教科書に挙げられたのはその中の七章である。

日本教師会教育研究大会のお知らせ

今年度は岐阜市で行われる予定です。

日時　元年８月３日（土）13：00～17：00
　　４日（日）９：00～12：00

会場　「ハートフルスクエアG」（ＪＲ岐阜駅構内）

研究主題
「新しい時代を切り拓く国民教育の在り方を求めて」

なおこれに伴い研究紀要「日本の教育」も発行される予定です。執筆される方はご準備をお願いします。

会費納入のお願い

前号でお知らせしたとおり、東京都教師会では這般の事情により会費制度を取らせていただいております。今般早速お振り込みいただいた方もあり、まことに有り難う存じます。

引き続き、次により何卒宜しくご協力をお願いします。

年額　二千円
口座　みずほ銀行港北ニュータウン支店
店番号　７４３
普通預金　１３３０１５０
名義　佐藤健二

お願い

「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。

字数は三千字程度以内でお願いします。ただしこれより長いものは数次に分けて掲載することもできます。発行は一、四、七、十月の年四回です。

仮名遣いは古典現代いづれかに統一して下さい。また、写真や図版はご相談ください。

送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス（佐藤）
komasato@juno.ocn.ne.jp